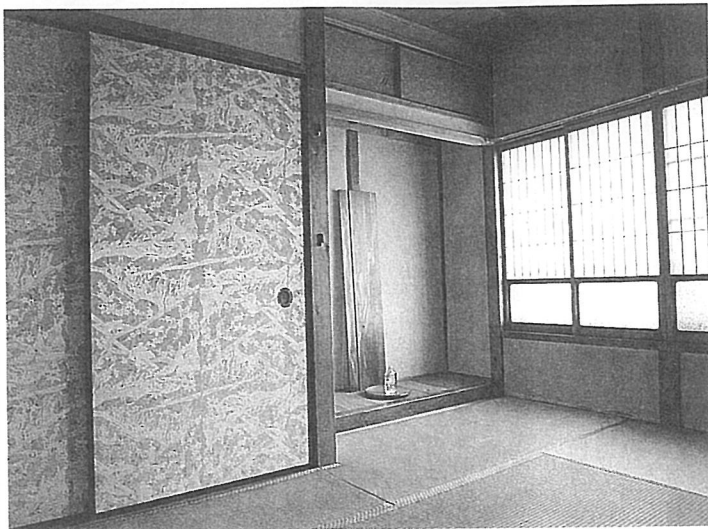


永津禎三展をみて

岡田 有美子



琉球紅型の図柄に沖繩の自然の風景が染められるようになったのは、戦後なのだといふ。廃虚の中で失われた風景を、必死に留めたいと願ったからなのかもしれない。紅型は日本や中国との交易の中で生まれ、沖繩にはない草花や季節の遣う花々と沖繩独特の図柄が混ざり合っている。そ

開かれた。永津は愛知県立芸術大学大学院を修了後、1982年から琉球大学教育学部で教えており82年から30年間で制作された作品群が展示された。

2階のしつこい壁の洋間には不思議な奥行きをもつ「TAKI Series」(ワタキシリーズ)の屏風作品と

という架空の人物の書齋を思わせる部屋で、細部まで作り込まれた仕掛けにより、あたかも高木氏がそこに生きたかのように感じられる。

一連の仕事から見えてのは、さまざまな文化が出会い、連なってきた長い時間の層へのまなざしであり、自然が脈々と受け継いできたなまめか

時には反転させ、動きのある画面を作り出す紅型の自由さが感動し着想を得たというラベラ作品である。しかし図柄は上から、永津によって引かれた白い繊細な線で覆い隠され、かろうじて川や花のようなのものが判別できる。

線がさまざまな方向から何度も引かれることで、潮目のよめなつねりを生んでおり、その中に浮かぶのは翻弄される沖繩の風景のようでもあるが、3・11後を生きる今、描くうちに津波のイメージが頭をめぐったと永津はいう。

によって矛盾をそのまま受け止め、共存したいという思いが込められているように思う。

永津自身、外から来た他者として常に文化の衝突を肌で感じてきたはずで、その上で本来同居しないものを旧家の空間に重ねた繊細な見立により、紅型の世界観が3Dで立ち上がったような場となっていた。展覧会は終了したが、一部作品は6月13日まで愛媛薬部にて見られるのでぜひご覧いただきたい。

(シマールカスメンバー)

紅型に浮かぶ文化の衝突

これは多文化との摩擦の中にある、象徴的な沖繩の風景なのだろう。

2012年の年末から3週間、名古屋にある築100年の旧家を改装したカフェギャラリー「愛媛薬部にて」「永津禎三1982-2012展」が

「永津禎三1982-2012展」より「名古屋市中・愛媛薬部ギャラリー」

檜田型作品が置かれた。隣和室の床の間には、焼酎ボトルにムクゲの花を詰め、琉球漆器、板絵が置かれ、壁には着物を縫い合わせたような十字型の絵画が掛けられた。

しき、それらを繋いで行き交う人々の織り重なる記憶である。1階に展示された作品「Turbulence Series」(タービュランスシリーズ) Katagami No.1 は、絵画としては12年ぶりの新作で十字型、モノクロの薄暗い画面をよそ見する2階の作品と同じ紅型の型が使われている。同じ型を

よそ見ればよそよそまの唐草模様で十字型の絵画と同じ図柄が重なっており、紅型の型紙を使って唐紙の上に刷ったと

よそよそまの唐草模様が重なっており、紅型の型紙を使って唐紙の上に刷ったと